

第11回8020童話賞

一般の部 「童話大賞」作品

「歯みがきの天才」

ユウトは、天才少年が出ているテレビ番組が大きらいでした。

そういう番組を見ると、ユウトのお母さんはきまってる、

「ユウトも、この子をみならってがんばるのよ」

などと言い、ひどい時には、

「こんな子が、お母さんの子どもだったらいいのになあ」

などと言うのです。

そして、六月の終わりのころ。

その日の朝のニュースでも、天才少年のことが、しょうかいされていました。小学生の男の子が、オセロの大会で日本一になったというのです。

「ユウトの思ったとおり、お母さんは言いました。」

「へえ、すごいわねえ。この子、ユウトと同じくらいの年じゃないの」

もう、そのあとの話を聞くのがいやだったので、「ユウトはさっさと学校へ行きました。

学校へつき、教室に入ると、なんだか、みんながさわいでいました。

みんな、教室のうしろのけいじばんの前にあつまっています。

「なにしてるの?」

ユウトは、なかのいいキョウスケに声をかけました。

「ほら、これ。ゆうべ、先生が作ったんだってさ」

キョウスケがゆびさした先を見ると、そこには、

『クラスのコウ 大しゅうこう』

と、マジックでカラフルに書かれた大きな紙がはられていました。

『サッカーの天才 マサシくん』

『国語の天才 ミチヨさん』

どうやら、クラスメイトぜんいんのこと書かれているみたいです。

「天才だっけ?」

ユウトはあわてて自分の名前をさがしました。すると、はり紙のすみの方に、

『歯みがきの天才 ユウトくん』

と、書かれていました。

「なんだよ、これ!」

ユウトははずかしいやら、はらがたつやらで、午前中のじゅぎょうのなかみなんか、ぜんぜん頭に入ってきてませんでした。

そして、ユウトは給食をいそいで食べ、いそいで歯みがきをして、昼休みになるやいなや、先生にこうぎをしにいきました。

「先生! あれ、なんなんだよ! ぼくが歯みがきの天才って!」

ユウトがカンカンにおこっているというのに、先生は、にこにこしてこたえました。

「ああ、あれか。ユウトくんは、この前の歯のけんしんで、このクラスで一人だけ、虫歯が一つもなかったからさ。給食のあと

も、ユウトくんは、きちんと歯みがきしているだろう。だから、歯みがきの天才というのがふさわしいと思ったんだよ」

ユウトは、歯みがき粉でスースーしている口をもごもごさせて、だまりました。

しかし、ユウトには、歯みがきをするこのなかがすごいのか、わかりませんでした。

ユウトはうつすらと、思い出しました。

今よりもっと小さいころ、お母さんが歯みがきをおしえてくれたことを。

ユウトが一人で歯みがきをする時、お母さんはほめてくれました。だから、毎日、ユウトは歯をみがきつつけました。

でも、歯みがきなんてユウトにとっては、

もう当たり前のことです。

今では、歯をみがいても、お母さんはほめてくれませんし、ユウトもほめてもらうために歯をみがいているわけじゃありません。「そんなの天才なんかじゃないよ。そんなの当たり前のことじゃないか」

ユウトがつぶやくと、先生は目をまるくして、そして、にかっとわらいました。

「いやあ、そんなこと言った子は、はじめてだよ。こりゃあ、本物の天才だな。はっはっは」

ユウトはわけがわかりませんでした。

そんなことより、あのはり紙をお母さんに見せないようにしなければなりません。

明日、さんかん会があるのです。

家にかえて、ユウトは夕ごはんのしたくをしているお母さんのところへ、そろりそろりとよっていききました。

「ねえ、お母さん」

「うん、なあに？」

「明日のさんかん会だけだね。教室のうしろにはってあるはり紙は見ない方がいいよ」

「えっ、どうして？ なにかよくないことでも書いてあるの？」

「そうじゃないけど……。とにかく、見ない方がいいよ！」

さげぶようにそう言うと、ユウトは自分の部屋にかけこんで、夕ごはんができてくるまで出てきませんでした。

そして、つぎの日。さんかん会がはじまって、お父さんやお母さんたちが、つぎつぎと教室に入ってきました。

クラスみんなは、うしろをちらちらと見て、となりのせきの子と、なにかこそそ話したり、くすくすわらったりしていました。でも、ユウトはうしろを見ることなく、きず、ずっとだまっています。

そうして、さんかん会は終わり、ユウトはどきどきしながら、家にかえりました。

「おかえり、ユウト」

お母さんがほえみながら、出むかえました。

「ユウト、あのね。お母さん、うしろのはり紙、見ちゃったわ。だって、あんなに目立つんですもの」

ユウトは、見ちゃだめだ、と、はっきりに言えばよかったと思いました。

「ユウト、すごいじゃない。歯みがきの天才なんて」

お母さんは、ユウトのかたに、やさしく手をおきました。

「よそのお母さんがたは、子どもが歯みがきをしないってこまっている人がおおいのでも、ユウトは言われなくても、毎日きちんと歯みがきをして、本当にえらいわ」

お母さんは、とてもうれしそうでした。

「ユウトは、なんだか、自分がものすごくカッコ悪いことをしたような気持ちになりました。そう思ったら、だまっていることができなくなりまして。」

「……ごめんなさい」

「えっ？」

「お母さん、本当は歯みがきの天才なんかより、もっとすごい天才の方がいいんですよ？ ぼく、もっとがんばって、いろんな天才になるから……、だから……」

ユウトはなにを言ったらいいか、わからなくなっ、下をむきました。

お母さんは、こまったような、かなしいような、うれしいような顔をしました。

「なにを言ってるの。歯みがきの天才で、もうじゅうぶんじゃないの」

お母さんはユウトをだきよせました。

ユウトは、これからも毎日、歯みがきをしように思いました。